狂犬王子にお仕えしています。

河の上リン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
狂犬王子にお仕えしています。

【Ｎコード】
Ｎ５７４９Ｚ

【作者名】
河の上リン

【あらすじ】
突然見ず知らずの男たちに拉致されて、気づけばガルダム国の第６王子、ゼイル様にお仕えすることになったあたし。
この王子、世間では、病弱で滅多に国政に顔を見せない麗しの幻影王子として名高いんだけど、実は国王直属の秘密組織『狂犬』の若きリーダー。しかもドＳで最凶最悪の魔王みたいな男だったのだ。
なんでか分からないけど気に入られたあたしは、王子付き専属メイド兼狂犬のメンバーとして、日々奮闘する羽目に…。

ワニ池での攻防（前書き）

思いつきではじめました。どうなるか分かりませんが、よかったら見てやってください。

ワニ池での攻防

神様。一つお尋ねします。

もしもこの世界に本当にあなたがいるのなら。

私は一体どんな罪を犯したのでしょう。

教えてください。

どうして、私にこんな試練をおあたえになるのか。

どうして私はあんな、あんなドS王子の部下になったのでしょうか…。

っていうか、あたしに何の恨みがあるんですか！？！？！？

あたしは神様への呪いの言葉を胸に刻みながら、必死に逃げ回る。

ここは水の中。後ろにはぱっくり口を開けたワニ。

そして極め付け。

あたしは泳げない。

「いやぁぁぁぁぁ――――――――――――っ！！！！！」

なんで、なんであいつら、陸の上では人の足には敵わないのに、水の中だとあんなに早いんだ！！！ものすごいスピードで、あたしを平らげようと常にお口は準備万端状態。

そしてあたしはまさかの難易度高い着衣水泳。かといってここで泳げないからといって諦めれば、あたしの末路は溺れたところをワニに食べられるか、もしくは溺れる前にワニのおなかの中かどちらかだ。

「もぉ――――いや！！こんちくしょう！！！」

だから必死で手も足も体全体も使ってがむしゃらに逃げ惑う。しかし、本当に呪いたいのはこの状況でも、ワニでも、実は神様でもない。

「おいテイ！！逃げ回ってないで、さっさと例のブツ探せ」

池のふちで優雅にタバコなんぞ吸っている、あの最低最悪男だ！！

あいつ、泳げないと知っていながらあたしを池にたたき落とし（しかもワニがいるって知ってるくせに）、あまつさえ池のどこかにあると思われるある証拠品を取って来いって命令したのだ。

「ちょ、ゼイル様、無理ですって無理無理無理無理…わっぷ」

勢い余って水が喉の奥まで入り込む。が、そんなあたしのある意味命を懸けた訴えにも、彼は耳を貸してはくれなかった。

「無理？んな言葉、俺の辞書には載ってねぇから」

じゃああんたがやれ！！なんて言えないあたし…。彼の下についてもう長いこと経つけど。あの鬼畜で悪魔みたいな男は、決して助けてはくれない。ならば、自分の命は自分で守るしかない！

幸い水での動きもつかめてきたので、あたしは拙い泳ぎをしながら必死に打開策を考える。

問題はあのワニだ。あいつさえいなくなれば、まだ勝算はある。

あたしは犬かきをしながら辺りを見渡す。個人の所有する池にしては広い方で、綺麗な睡蓮も浮いていれば水草も漂い、飛び石なんかもおいてある風情な作りだ。それを見たあたしはふと、あることを思いついた。

ふむ、いけるかもしれない。

あたしはその中でも一番大きな石に目を付ける。あれをあれしてあれすればあれにならないだろうか。ええい、考えてる暇はない！あたしはスピードをあげると、囲めばあたしの腕、ふたまわり分はありそうなその岩をを目指す。

そしてなんとかそこまで辿り着くとその石にしがみついた。それから乱れた呼吸と疲労した表情をあえて顔に張り付け、ワニの方を見た。

彼（彼女かもしれないけど）は疲れ切ったあたしを見てわずかにほくそ笑む（かどうかは分かんないけど、少なくともそんな風にあたしは見えた）と、スピードを落とし、ゆっくりと近づいてくる。あたしはそこから動かない。ワニの目がきらりと光った。

その姿はもろに、弱っている獲物をじわりと追い詰める肉食動物そのもの。ようやくご飯にありつける…そんな彼の思いが伝わってくる。
そしてそのままの速度でぐんぐんやってきて、大きく開いた口を更に大きく広げ、あたしの体ごと丸のみにしようと覆いかぶさって…
今だ！その瞬間、あたしは電光石火の速さで石から離れる。

直後、ガリッという固い音が辺りに響いた。間一髪、あたしはワニの恐怖の一口から逃れる。あの音から
察するに……見ると、ワニが岩を食べている状態。

「ふぅ、よかった成功した」

もちろん、そうなるように仕向けたんだけど。あたしを丸のみしようと限界まで口をあけて襲い掛かり、案の定あのワニ、岩が喉まではいりこんで抜けないらしい。頑張ってジタバタしてるけど、びくともしない。顎も外れてそうだ。

この隙にとあたしは腰にさした刃物を鞘ごと引っこ抜く。刃は出さない。あの長官と違って罪もない生き物を叩き斬る趣味はないし。ではどうするかというと。あたしは水中で必死に足をもがかせながら鞘を付けたままワニの方に近寄ると、その無防備な頭に思いっきり手にしたそれを叩きつけた。

「どりゃ――――――！！！」

鈍い音がして。見事にヒットしたあたしの武器で頭をやられたワニは、そのままの格好で気絶する。

「……とりあえず、助かった」

ほんと、九死に一生ってこのことなんじゃないのかな、うん。

さて。それで本題はここからだ。あたしはこの水の中で、あるブツを見つけないとならない。早くしないとワニが起きちゃうし、かといって上司は…あ、茶飲んでる。

絶対手伝ってくれる気皆無だ。分かってたことだけど。

あたしは手にした武器を腰に差そうと（またワニが襲って来た時ように持っとかないと不安だ）…つもりがささらず、そのまま落下していくあたしの武器。

「!? やば」

慌てて水に顔を付けるとあとを追う。重みでどんどん下まで落ちて行き、ついには最下部に辿り着いた。水は綺麗だから視界もよく、すぐに落とした刀を見つけることができた。そんなに深くなくてよかった。

今度はきちんと腰にしまうと、あたしは上に上がろうと…ん?

目の前にはあのワニがくっついている石。その石の一番下に、なにやら怪しげな物体がくくりつけられている。明らかに人工物だ。急いで近づくと、縛ってあった紐を刀で切る。

それは長方形の真っ黒な箱、だった。

これは…もしかしてもしかしなくとも、あれなんじゃないのか?必

死に探し求めていた、例のブツ。そんなに重くないので、あたしはそれを手にしたまま上に上がる。荷物を抱え、短期間でマスターした犬かきを駆使し、そしての男のところに戻ると、どすんと彼の足もとにそれを置いた。

「王子、おそらくこれじゃないでしょうか？」

うー、しかし寒い。水の中にいたらそうでもなかったけど、陸に上がると風が身にしみる。だって季節は１０月も終わり。秋風がビュービュー吹き荒れる頃合いだ。寒さに凍えながらあたしが着ていた服を絞っていると、なんともおもしろくなさそうな顔で御仁がぼやいた。

「なんだ、もう見つけたのか。つまんねぇな」
「いや、なんでつまらないんですか。っていうかあれ以上あそこにいたら、あたし生きて戻れないですって」
「慈悲で助けたワニが復活して、もう一ラウンドって思ってたんだがな」

そう言ってククともろ悪人顔で笑う。なんだその笑い、完全に黒い笑み…って以前に、全く王子っぽくないんですけど。

「あたしを殺す気ですか！？」
「大丈夫だ。いざとなれば助けに行ったさ。多分」
「多分って絶対その気ないですよね…ってそれよりどうします？これカギ付いてますけど」

薄情な王子のことはひとまずおいといて。あたしが命がけで持ってきたこいつには、頑丈そうかつ複雑そうな鍵が二つも付いている。しかし王子は何ともなしにしれっと言い放った。

「え、もう開けたけど」

そして彼がカギを持ちあげた瞬間、パーンと鍵がはじけ飛んだ。

「はや！？」

なんだその早開けの技術。一介の王子が、強盗でも生業にしてたんですかってくらいの腕前だ。

「お前がちんたら陸に上がってる間にとうに壊した」

その手には細長い針金が。成程、ピッキングか。仕事が早いことで。

「さて、それじゃあ中身を拝見するか」

もはやただの箱と化したそれを、王子は乱暴にばんと開け放った。あたしも興味シンシンで覗きこむ。すると中には…

「やっぱりな」

そこのは、あたしたちが探し求めていたものと、そしてなぜか大量の女物の下着が入っていたのだった。

狂犬王子の取り調べ（前書き）

時代背景とかはごちゃごちゃですが、あんまり気にしないでください…

狂犬王子の取り調べ

「それで、あの男は自白したのか？」

ここは、ガルダム王国のサイド城最上部にある、とあるお部屋。中は豪華絢爛で、西国から渡って来た装飾品やら置物で彩られている。そんなお部屋の、大きな窓の前に。

大きな長机に両手を組み、あたしたちを見つめる一人のお方の姿があった。

険しい顔つきであたしたちを見据える彼こそ、この強大で巨大なガルダム王国のピラミッドの頂点に君臨する、ザイレン王である。

彼は一昨日起こった『ドミンゴ伯爵麻薬所持容疑』（別名：ワニ事件）の報告に来たあたしたちの話を黙って聞いた後、そう言った。

するとあたしの前に立つゼイル王子はにやりと笑みを浮かべながら言い放った。

「ええ、もちろん。ぺらぺら全部話してくれてますよ。あれじゃあ黒幕に辿り着くのも時間の問題かと」

すると、歴代の王の中でも一番厳格だとして知られるあの王様の顔に、珍しく笑みが浮かんだ。

「さすがは『黒い狂犬』。狙った獲物は逃がさないな。一体どんな手を使って、自分の非を認めようとしなかった頑固者を口説き落とした？」

「いやいや、それほどでも。俺は何もしちゃいないですよ。あの男

が自発的に、勝手にしゃべってくれてるだけですから」

しれっとそう言う王子に、あたしは思わずツッコミをいれそうになる。

…世間ではあれを、脅迫と呼ぶんですよ、と。

まあそれにしたって、ゼイル王子の取り調べは見事だった。

麻薬を購入している疑いの掛けられた、ドミンゴ伯爵。しかしその実際のブツが彼の屋敷で押収されて尚、しらをきり、自分の罪を決して認めようとしなかった。そんな彼のいる部屋にやって来たゼイル王子。

あきらかに堅気でない雰囲気をぷんぷんさせ、くわえ煙草で入って来た彼は伯爵の正面に座ると、開口一番こう切り出した。

「お前の庭の池から、ブツが押収された。いい加減罪を認めたらどうだ」

しかし当の伯爵は顔をぷいと不愉快そうにそむけると、

「ふん！それがどうした。わしの屋敷にあったからといって、それがわしの者とは限るまい。屋敷で働くメイドや庭師の可能性もあるだろうよ」

なんでメイドや庭師があんな危険極まりないワニ池に、麻薬なんて隠す。んな命の危険犯さなくったって、別の選択肢があるだろうが。

「だがあの池にはワニがいた。あんたにしかなつかない、非常に凶

暴なワニだ。そんなところに果たしてお前以外の者が隠せるか？」
「そんなことわしの知ったことではないわい！！現に隠せているではないか。わしではないがな」
こうやって、わしじゃないの一点張り。さすがにあたしたちもお手上げ状態だったんだけど…。
すると王子はふぅと息を吐くと、こういう場ではあまり見せたことのない、柔らかな微笑みを浮かべて伯爵を見た。
そして次の瞬間、彼の口からとんでもない言葉が飛び出した。
「分かりました。ではお帰りいただいて結構です」
「！？！？！？」
え、いや、だって、どう考えたってこのおっさんが犯人じゃない！？なのに本人が認めていないからといって、あっさり逃がしちゃうの！？
脇で見ていたあたしは慌てふためくけど、王子は全く動じず笑顔のままだ。
当の伯爵もこの発言に少し驚いたのか（自分で無実だって言い張ってたくせに）戸惑いの顔を見せていたけど、彼の言葉が本物と分かると鼻息荒くふん、と言った後その場から立ち上がった。
「分かればいいんじゃい、分かれば。じゃあわしは本当に帰るからな」
「ええどうぞ。お気をつけて」

そして伯爵が足を踏み出そうとした瞬間、王子は「ああそう言えば」と言葉を切りだした。

「昨日見つかった箱の中には、麻薬のほかに女性用の下着がいくつも見つかった。しかもどれも使用済み」

「……！？」

「人の趣味にとやかく言うつもりはないが、まさか天下のドミンゴ伯爵が下着泥棒的な趣味をお持ちだったとは驚きです」

「待て、わしにはそんな趣味はないぞ？」

「失礼。では自分でつけて楽しむ性癖をお持ちだったとは」

「黙れ、どっちも違うと言っているだろう！！おのれ若造の分際でわしに意見するつもりか！？」

顔を紅潮させてゼイル王子の胸元を掴む。あたしが止めに入ろうとすると、王子はそれを手で制した。それからなんともない口調で言葉を続ける。

「いえそんな滅相もない。まあ別に伯爵にそんな趣味があろうと罪になる訳じゃないし、今回の事件にもなんら関係がない。ただ、伯爵にそんな趣味があると、俺もどこかでぽろっと言ってしまうかもしれない。例えば行きつけの遊街のなじみの女とか。近くの茶屋で働く女の子とかに。そして人の噂話とは早いもの。いくらこっちが口止めしてても必ず外部に漏れる。しかもはじめより大きくなって世間に広まると言うのが世の常」

「違うと言っているだろうが！！わしが誰だか分かって言ってるんだろうな！？もしもそんなことをしてみろ！！ただじゃおかないからな！！」

しかし全く臆す様子なく、ゼイル王子はひょいと肩をすくめた。

「どうぞお好きに。だがいくら俺に報復したところで噂が消えることはない。下着を付ける、もしくは盗む趣味がある変態親父、っていう噂があった事実は消えないし、これから先一生変態呼ばわりされるんじゃないのか？」

「ぐぬぬぬぬぬ」

「俺には耐えられないね。世間に変態のレッテルを貼られて生きて行くのは。白い目で見られえて、後ろ指さされて、あーあ、かわいそうに！！」

「……」

「麻薬をやってて捕まりました、っていうのと、そういう変態的趣味の男…。おいテイ。お前ならどっちが嫌か？」

唐突に話を振られて、あたしは思わず体をびくっとさせる。え、えと、どっちが嫌かって？うーん、麻薬をしているっていうのは犯罪だし、もちろん許されないことなんだけど。でも正直、

「生理的に受け付けないのは後者です」

瞬間、伯爵の目がかっと大きく見開かれる。驚愕、ショックっていう感じ。反面、王子は目であたしに、「よく言った」って言っている感じがする。

それからゼイル王子は、再びにっこり笑った。さっきと同じ優しい顔。いやでも、違う。これはいい笑顔だ。他人を追い詰めたときに見せる、有無を言わさない裏ありまくりの、いつもの王子らしい邪悪な微笑みだった。

「お引き留めしてしまって失礼。どうぞお引き取りください」

その瞬間、伯爵は手に入れていた力を抜き、その場にへなへなと崩れ落ちた。
伯爵が全てをぶちまける方を選んだのは、当然である。

つまり、自分の変態的性癖を世間に公表しない代わりに、麻薬のことは認め、知っていることは全て話すと。

しかし正直あんな取り調べ、彼にしかできないことだと思う。あの脅迫のやり方は、本当にすごかった。確実に相手を追い詰める手法は、さすが狂犬のトップ。

あたしはあの時思ったもん。この男、絶対に敵に回したくないって。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5749z/

狂犬王子にお仕えしています。

2011年12月19日03時47分発行